

国労ってどんなところですか？

ウチでは本音が通用します

国労では、定期集会、大会等において、職場の労働問題や組織拡大への取り組み等に関し、個人の「本音」による赤裸々な意見が次々と出ます。こうした「声」が集約され、直接会社に届くのはもちろん、時には国労そのものを批判する意見も容赦なく上がって来ます。しかし、そこで発言者が村八分を喰らうかといえども、そんなことはなく、また、組合員同士がバトルになっても、最後はお互い様と本音をたたえ合い、「仲間」という安定した関係に収束します。斬新ですが、これこそが本当の意味での「団結」であり、先人方が数多くの労働条件を勝ち取ってきた基盤でもあります。「言っても変わらない」。このように、あたかも達観したかのような口調で、諦めることの重要性を説いてくる方は多いですが、彼らが仕事を割り切った上で人生に満足しているはずもなく、気が知れた者どうしの井戸端会議では不満や悪口が延々と飛び交います。結局、問題の本質は、言っても変わらないシステムそれ自体というより、言いたいことを堂々と言えない「同調圧力」に支配された周辺環境にあるわけです。「会社に不満があるけど、どうしたらいいか分からない」という方は数知れずいますが、こうした場もあるということをは是非知っていただけたらと思います。

新規加入者が語る国労

国労は、今年の2月に結成80年を迎えました。長い歴史の中で培われてきた労働者としての意識は高く、会社の不当行為や年休問題など、働く上での不安や不満について、他会社の労働判例と自らの職場を比較しながら、その違法性にまで議論が及ぶこともあります。個々が知識を身につけ、必要であれば組合として会社と闘う姿勢を持つことが不可欠であると考えています。

会社は、決して完璧ではありません。むしろ、社員の本心をつかめないまま誤った判断を正当化し続ければ、業績の低迷を招き、最終的には事業の存続すら危うくなることは、これまでの多くの事例が示しています。

私たちの会社はどうでしょうか。現場では同意なき配転命令、転勤命令、休日出勤の常態化、マルチスキル化が進められ、場当たり的な施策が混乱を招いている実態も見受けられます。その結果、若年層、中堅層の離職につながり、職場の活気や活力が失われていきます。活気を失えば企業としての魅力が低下し、学生や、求職者から選ばれない、人が集まらない企業へと転落していきまします。そして残された社員の意識とモチベーションの低下が連鎖し悪循環が加速していきます。国労は、こうした状況に対し、様々な視点から問題提起を行い、全ての労働者が安心して自らの労働力を提供できる職場づくりを目指し、組合活動を行っています。

第 210 号

2026 年 5 月 1 日

発責 国労九州本部

博多区博多駅東3丁目9番3号

ニッコーハイツ1003号

NTT 092-483-1515



若い力